

『復古編』諸版小篆字形対照表 解題

広島大学総合科学部 鈴木俊哉

本表は、北宋・張有の『復古編』の本編について、諸版の小篆字形を切り出して対照表としたものである。材料とした資料は以下の 6 種である。

- A) 黄丕烈旧蔵影宋写本 四部叢刊三編所収
- B) 元・好古齋刊本 中華再造善本所収
- C) 鉄琴銅劍楼旧蔵 明・馮舒跋本 北京国家図書館善本書号 3378
- D) 繆荃孫旧蔵 奇字閣写本 台湾国家図書館索書号 110.2 00982
- E) 文淵閣四庫全書本 台湾商務印書館による影印
- F) 文津閣四庫全書本 北京商務印書館による影印

1. 凡例

		影宋	元刊	明写	奇字	文淵	文津	
FGB-0001	影宋:巻01.001a.g01 元刊:巻01.001a.g01							僮
FGB-0002	影宋:巻01.001b.g01 元刊:巻01.001a.g02							箎

表の各欄は左から以下の内容を示す。

① 項番

FGB-dddd の形式で影宋写本の掲出順に示す(FGB-0001~1239)。ただし、FGB-1016 と FGB-1017 の間にある 1 文字「𠄎」は元刊本にしか無いため、FGBY-01 としている。

② 掲出箇所

影宋写本および元刊本での掲出箇所が、巻 1・葉 2 右・頁内見出し番号 3 であれば、巻 01.002a.g03 のように示す。葉の中での頁の右・左を a(右)、b(左)で示す。見開き装丁の場合には右側が b、左側が a になることに注意されたい。

③ 影宋

黄丕烈旧蔵影宋写本の字形を示す。

④ 元刊

好古齋元刊本の字形を示す。

⑤ 明写

鉄琴銅劍楼旧蔵 馮舒跋本の字形を示す。

⑥ 奇字

繆荃孫旧蔵 奇字閣写本の字形を示す。

⑦文淵

文淵閣四庫全書の字形を示す。

⑧文津

文津閣四庫全書の字形を示す。

⑨対応 UCS 漢字

小篆を指示可能な UCS 漢字の主なものを示す。日本の常用漢字対応のため新字体も含む。また、字形が似ているが字源・字義が異なるものも含む。

2. 各資料の特徴について

2.1. 影宋写本


復古編は北宋代に成立したが、北宋代の印行は知られておらず、南宋代の王佐才による刊本と、虞仲房による刊本の2種があったと考えられている。これらも刊本は現存していない。王佐才刊本は影宋写本により伝わるが、虞仲房刊本は清代に復古編を翻刻した葛鳴陽が言及した記録しか情報が無い。

黄丕烈旧蔵影宋写本は、明末清初の蔵書家である錢求赤(1624～卒年不詳、述古堂の錢曾の親族である)が所蔵する影宋写本を癸巳の年(順治10年、1653)に写したものであることが巻末に書かれており、王佐才の序を含むので、王佐才本からの写本と考えられている。このほかにも影宋写本の系列と考えられている清代の資料がいくつか知られているが、書写が黄丕烈旧蔵本より古いものは見つかっておらず、現時点では書写が最も古い影宋写本と扱われている。

2.2. 元刊本

元末の至正丙戌(1346)に好古齋の呉志淳が翻刻したもの。中華再造善本で影印出版されている。排列は影宋写本に同じだが、本編は1字(坳)多く収めている。好古齋本はそれ以前の印行に言及した序文を含まないため、何らかの宋刊本を翻刻したものかも不明である(巻末に附された東湖精舎の跋文には、雍虞集が元初の大徳年間に復古編を見たことを書いているが、それを翻刻したものとは書いていない)。邱永祺 2011 では王佐才刊本を経由しない別の系列と考えている。

2.3. 明・馮舒跋本

鉄琴銅劍樓旧蔵の写本で馮舒(1593～1649)による跋文が附されたもので、崇禎辛未(1631)の年記がある。一見すると上記の影宋写本に似るが、王珏 2020 の調査によれば、黎民表明刊本が影宋写本に比して誤っている箇所において、馮舒跋本は黎民表明刊本に従っており、底本が黎民表明刊本であることが判る。黎民表明刊本は明・萬暦年間に印行されたもので、現在では中国科学院の所蔵のみが知られる。この黎民表明刊本は影印出版が無いため、この写本を代替として組み込んだ。影宋写本や元刊本との違いとしては、FGB-0070 を影宋写本・元刊本とも「窺」に作るのに対し、黎民表明刊本は「規」に誤っており、これを引き継いでいる状況が見られる。

馮舒跋本には現在では補正を書き込んだ紙片が貼り付けられ、また朱筆での補正も加えられているように見えるが、この補正がいつ加えられたかははっきりしない。台湾国家図書館が所蔵する別の写本(索書号 110.2 00985)はこの補正前の状態を写したように思われる。

2.4. 奇字閣写本

台湾国家図書館はいくつか復古編の写本を所蔵しているが、そのうちこの奇字閣写本は王佐才序文が無いかわりに、東湖精舎の跋文と著者・年記不明の跋文が附されている。邱永祺 2011 では東湖精舎の跋文を根拠に、奇字閣写本は元刊本から模写されたものと考えている。しかし、その字形は元刊本の特徴

を殆ど持たず、影宋写本よりは黎民表刊本に近いことが分かる(たとえば上記 FGB-0070)。

東湖精舎の跋文をどこから得たのか推測は難しいが、王佐才序文を欠くことについては、中国科学院所蔵の黎民表刊本には王佐才の序文が刻されておらず、旧蔵者の馮龍官が手書したものが添付されていること(王珏 2020)、さらに馮舒跋本も王佐才の序文を欠くことから、黎民表刊本は王佐才序文を欠くものであった可能性があり、そこから写されたと考えても説明できるであろう。

2.5. 四庫全書 2 種

四庫全書の復古編は紀昀所蔵の黎民表刊本から書写したとされる(提要には「此本爲明萬曆中黎民表所刊」とあり、紀昀が復古編を提出したことは吳慰祖『四庫探進書目』p.184 に見える)。文淵閣本、文津閣本の間に大きな字形差は無い。ただし、文津閣本は FGB-0444～FGB-0461 と FGB-0462～0497 が逆転している(～FGB-0443, FGB-0462～FGB-0497, FGB-0444～FGB-0461, FGB-0498～という順序になっている。字形を対照するため本表では順序を改めている)。小篆字形と積字の対応は崩れていないので、文津閣本の書写の前に底本の葉 25・26 が入れ替わったものと思われる。同一葉の中で順序が誤っていることから、書写の分業のミスではなく、底本の綴じ誤りが疑われる。

謝辞

本表は科研費課題番号 19K12716 の成果です。訪問による文献調査が困難な社会情勢下にあり、邱永祺先生、陳永聡様、また北京國家圖書館、上海圖書館、臺灣國家圖書館、靜嘉堂文庫、広島大学図書館の方々に多大なる御助力を頂きました。

参考文献

『復古編』, 黄丕烈旧蔵影宋写本, 四部叢刊三編

『復古編』, 北京國家圖書館所蔵好古齋元刊本, 中華再造善本, 北京圖書館出版社, 2004, ISBN 7501325472

『復古編』, 北京國家圖書館所蔵 明・馮舒跋本, 善本書號 3378

『復古編』, 臺灣國家圖書館所蔵 清・繆荃孫旧蔵奇字閣写本, 索書號 110.2 00982

『復古編』, 四部叢刊文淵閣本, <https://archive.org/details/06052855.cn> ～ [06052857.cn](https://archive.org/details/06052857.cn)

『復古編』, 北京商務印書館, 文津閣四庫全書, 經部小學類 第 77 冊, pp.495-524.

邱永祺: 『張有《復古編》総合研究』, 臺北市立教育大學碩士論文, 2011, <https://hdl.handle.net/11296/538zcm>

王珏: 『北宋張有《復古編》研究』, 中國社會科學出版社, 2020, ISBN 9787520372626

変更履歴

1.0 (2022/05/11) 対照表のみ公開。

2.0 (2022/05/13) 解題を追加。対照表のカラム名を修正(明写 A→明写、明写 B→奇字)、対応 UCS 欄の作業用メモを処理。